

島根県教員研修会報告書

2009年8月4日、松江市中学校美術部会研修会、5・6日、島根県小学校図画工作科教育講座が行われ、京都造形芸術大学より福のり子教授、伊達研究員、学生2名（長谷川・矢野）が講師として参加した。受講対象者は中学校美術科教員と小学校図画工作教員である。

松江市中学校美術部会研修会（講師：福のり子、伊達隆洋）

松江市中学校美術部会研修会では、当初、福教授による講義を予定していたが、翌日からの小学校図画工作科教育講座に出席者の重複があったため、内容を変更し、ワークショップ形式の研修を行った。ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの《靴》（作品1）を用い、作品に関する情報などは一切伝えずにビジュアルのみをみて、この作品をみたことのない人に向けて、作品を言葉で伝える手紙を書くというものである。



作品1

各自の手紙の内容は、描かれているものの形態や色など要素を緻密に記述したものもあれば、こうした要素から受けた自分の印象を書き連ねたもの、あるいはその作品から想像したストーリーを書いたもの、この作品がゴッホの描いたものと知っており、そこから技法や画風について書いたものなどさまざまであった。

ワークショップのふりかえりでは、同じものをみてもその体験の仕方、切り取り方はさまざまあるという気付きや、客観的な記述は、誤解は生みにくいかもしれないが無味乾燥で作品の雰囲気伝わらないこと、逆に主観的な描写のみでは、雰囲気は伝わるかもしれないが、記述した人が思い浮かべているイメージとそれを読んだ人が想像するイメージが同じとは限らないといったことが話された。さらには、例えば「茶色」という記述さえ人によってどんな「茶色」を思い浮かべるかは定かではなく、客観的と思われる記述すら主観が入り込むこと、したがって主観を排した正しさという設定自体に無理があることが話された。

質疑応答では、対話型鑑賞を授業に取り入れるに当たって、評価の基準をどうすべきかという質問があった。鑑賞の授業の何を評価の対象とし、どう評価したら客観的な評価が出来るかという趣旨である。これについて福教授は、まず、鑑賞は客観的な評価の対象にならないという話になりがちであるが、では、制作ならば客観的に評価できるかといえば、実のところ制作においても客観的な評価を行うことはできない点を指摘した。使った色数や線の数を基準にすることは出来るかも知れないが、それが制作の評価として妥当であるとは言い切れない。また、他の教科においても、例えば国語の作文や読書感想文に客観的な評価基準が設定されているだろうかという問題を提起した。その上で、これらは客観的な基準が設定できないからといって評価が不可能かといえば、現に作文や読書感想文は評価がされており、また制作においても、合同品評会などで評価がなされていることをふまえ、対話型の鑑賞においても、子どもの気付きや取り組みなどを評価することが出来るのではないかという提案がなされた。

島根県小学校図画工作科教育講座

島根県立美術館にて8月5日、6日に行われた島根県小学校図画工作科教育講座では、初日午前は福教授による講義、午後は2グループに分かれ、福教授のナビゲーションによる対話型の鑑賞と、伊達研究員によるコミュニケーションのワークショップを各グループ交互に行った。また、2日目には午前に京都造形芸術大学の学生2名のナビゲーションによる鑑賞、午後には講座参加教員4名がナビゲーションに挑戦し鑑賞を行った。

初日午前の福教授の講義では、鑑賞教育とコミュニケーションをテーマに、これまで軽んじられがちな鑑賞者や聞き手といった受け手の重要性が説かれ、受け手が得るべき唯一の正解がないことによって生み出される多様性と、その多様性によって結果的に個々の人間の獨創性やアイデンティティーが担保されることが語られた。鑑賞教育がこれらの事態に密接に関係しており、ひいては美術・図工の枠を超え、他者との関係を生きる力につながっていくという提言であった。

午後は、作り手/話し手が投げた作品/言葉に、鑑賞者/聞き手として能動的に関わるトレーニングとして、福教授のナビゲイトによる《カラカラ帝》(作品2)、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ《椅子》(作品3)、ダイアン・アールバス《手榴弾を持った少年》(作品4)の3作品の鑑賞と、伊達研究員による、1対1の会話をを用いた『聴く・応答する』コミュニケーション・ワークショップを行った。参加者からは普段の会話がおざなりなものになっていたことに気づいたという声や、正解を求めないやりとりの可能性に言及する感想が聞かれた。

2日目午前は、京都造形芸術大学の学生二人(長谷川・矢野)のナビゲーションによる鑑賞を行った。鑑賞後、鑑賞教育を実践していくにあたりナビゲイターの研鑽のための方法として、ナビゲーションの講評について紹介し、参加者に実際に学生のナビについて講評を行ってもらった。

午後には、参加教員の中から前日に選出された4名に、実際にナビゲーションに挑戦してもらい、鑑賞後、他の参加者や福教授によるナビゲーションの講評を行った。1日という準備期間とは思えない完成度のナビゲーションは、島根での鑑賞教育実践の充実を感じさせるもので、講評でも高い評価を得た。

本講座への登壇は今年で4年目となるが、参加者多数の講座となり、島根県での鑑賞教育への関心の高さと、実践の根付きを感じる2日間であった。



作品2



作品3



作品4

京都造形芸術大学
アート・コミュニケーション研究センター
研究員 伊達 隆洋